

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第139号

イザヤ 65:1

平成19年4月27日

「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。事実、そればかりでなく、その事があってから三日目になりますが、また仲間の女たちが私たちを驚かせました。その女たちは朝早く墓に行ってみました、イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。」するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。．．．イエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

ルカ 24：19－49．付点付加

十字架刑による死から甦られたイエス・キリストは弟子たちに姿を現され、天の父の御許に召されるまでの四十日間、「神の国のことを語り、数多くの確かな証拠を持って、ご自分が生きていることを使徒たちに示された」（使徒の働き 1：3）。甦り後、まだ地上におられる間にイエスは、弟子たちを世界宣教に送り出すのに必要なすべてのことを教えられ、備えさせられた後、エルサレムで「聖霊のバプテスマ」を受けてから、地の果てにまでキリストの「証人」として出て行くようにと指示されました。

地上での最後の使徒訓練で、イエスがもっとも力を注がれたのは、全聖書を説き明かし、悟らせることでした。当時の聖書は「モーセの律法と預言者と詩篇」、すなわち、ヘブル語聖書（旧約聖書）でしたから、そこにキリストの奥義（キリストによる全人類の救い）の全容がすでに記されており、キリストにおいてそれらが「必ず全部成就すること」を説明されたのです。それは、驚くべきことに、イエスの直弟子をも含め、だれも、イエスが甦られるという預言やイエスご自身の生前の教えを理解し、信じていた者はいなかったからでした。キリストの「証人」となる弟子たち自身が、聖書に語られていることが必ず、全部成就することを信じるができなければ、まだ福音を知らない全世界の人たちに困難を覚悟で宣べ伝えていくことはできないでしょう。ヘブル語聖書に語られていることやイエスの教えが、「わたしの口から出るわたしのことばも、むなしくわたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる」（イザヤ 55：11）と神が言明されたように、すべて神ご自身によって成就させられるということを知ることは、キリストの「証人」として世界宣教に乗り出すのに必然でした。

ひとたび甦りのイエスに出会った弟子たちは、心は御言葉に燃え始め、絶望感に打ちひしがれていた彼らの霊は覚醒させられ、完全に換えられることとなります。人目を避けて錠を下ろした部屋に閉じこもり、不信仰とかたくなな心でおどおどしていた弟子たちは、甦りのキリストとの四十日間を過ごしたときには、非常な喜びに満たされ、いつも宮で神をほめたたえ、希望と確信に満ちた、神の言葉に堅く立つ「キリストの群れ」に換えられていたのです。

「聖書はあなたがたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです」（テモテ第二 3：15－17）と、パウロが弟子テモテに教えたように、神の計り知れない遠大なご計画の中で人類の贖いのために遣わされることになる神の御子、イエス・キリストとキリストによる救いを多くの預言を通して証している『ヘブル語聖書』と、キリストの初臨に関する諸預言

が如何に正確に成就したかをキリストの教えと言行を通して記録し、キリストの再臨に向けて今後成就されることになる多くの未来預言をも含んでいる『新約聖書』は共に、神の靈感によって著者が選ばれ、書かれたものであり、正確に書き写され、また千百以上の言語に翻訳されてきた実に驚くべき書物です。世界の宗教の教祖の中で、また、すぐれた教え、悟りの境地を開いた人たちの中で、この世に現れることが多くの著者によって誕生のはるか前から預言されて生まれた人がいるのでしょうか。ナザレ人イエス・キリスト以外にそのようにして生まれた人はだれもいないのです。聖書は、このイエス・キリストの顕れが、御降誕の何千年も前からすでに預言されてきたことを証言している書物なのです。

書物の歴史的信憑性を評価するとき、写本が原典から如何に正確に書き写されたか、また、出来事が正確に記録されているかどうかは問われますが、聖書の原典は残存していないものの、現存の写本の数、古さ、質は他のどの古代文書とも比較にならないほど優れており、何度も焼却の憂き目に遭ってきた聖書の歴史を振り返るとき、神がこの書物を後世に残すため、関わり、確実に守ってこられたことが窺えます。例えば、まず、写本数を例にとってみましょう。新約聖書には五千七百にも上るギリシャ語写本がありますが、古代文書の写本はせいぜい十～二十冊あればよいところで、聖書に次いで多いと言われているホーマーの「イリアッド」でも、六百四十三写本とのことです。聖書のすごさが分かります。ほとんどの古代文書では、原書から千年くらい後の写本が最古写本で、原書から五百年以内の写本はほとんどないのが現状ですが、新約聖書の最古ギリシャ語写本は何と原典から二十五～百五十年以内に書き写されているのです。現存の新約聖書の写本の正確さは99.5%と言われていますが、これは、聖書が、主張している真理に何ら影響を及ぼすことのない大変な精度で書き写されているということなのです。ホーマーの「イリアッド」の95%、ヒンズー教の「マハバラータ」の90%に比べても、聖書の正確さがだんとうつであることを物語っています。

次に、記録されている出来事の正確さを測るには、記録者、あるいは、著者の数と信頼度、また、出来事の時代に少しでも近い時代の著者の数が問われます。たとえば、いわゆる歴史上の出来事のほとんどがせいぜい一人か二人の著者の証言に基づいて書かれているのに対し、新約聖書では、使徒マタイ、使徒ペテロ、ペテロの同労者で代書人のマルコ、使徒パウロ、パウロの同労者ルカ、使徒ヨハネ、イエスの実弟ヤコブ、同じく、イエスの実弟ユダ、ヘブル人への手紙の著者（パウロの可能性大）と、九人もの著者が関わっています。しかも、これらの新約聖書の著者たちは記されている出来事を目撃者でもあり、出来事と同時代の者たちでした。

イエスは32CEに亡くなられたと考えられていますが、使徒パウロがコリント第一、第二、ガラテヤ人、ローマ人への手紙を書いたのは55～60CEの間ということで、学者たちは一致しています。新約聖書全体は、95CE頃までには書き上げられていたとみなされています。その後、使徒たちの死後百年足らずのうちに、新約聖書二十七書が初代教会の教父たちによって認められ、ローマのコンスタンティヌス帝の時代、325CEにニケア会議で、二十七書から成る今日の新約聖書が公に正典として定められたのです。

また、旧新約両聖書を通して、異なった著者の証言が千六百年に及ぶ時代に亘って集大成された書であるにもかかわらず、内容に矛盾がないということ、また、細微に至り首尾一貫しているということは、聖書の信憑性に疑いをさしはさむ余地を与えません。したがって、もし聖書の写本が信用できなければ、この世に存在するどの古代文書の写本も信用できないことになるといっても決して言い過ぎではないのです。

甦られたイエス・キリストは、弟子たちがキリストの「証人」として世界宣教に遣わされるためには、神の言葉『聖書』の理解と聖霊の働き（神の力を帯びること）とが不可欠であることを教えられましたが、英訳聖書の先駆者ウィリアム・ティンデル（1494-1536）も、地方の聖職者の聖書に対する無知に心を痛め、不正確であったラテン語のウルガタ聖書からではなく、ヘブル語とギリシャ語から英語への聖書翻訳を決意、神の言葉『聖書』の正しい伝播に尽くし、殉教した学者でした。ウルガタ聖書以外からの翻訳による英訳聖書を持つことが禁じられていた時代、「英国の福音宣教はラテン語聖書ではできない。母国語で書かれた聖書なくして平信徒を真理に堅く立たせることは不可能だ」と意を決して、翻訳許可の下りなかった英国を去り、ヨーロッパに渡ったのでした。アントワープで、支援をしてくれた英国人商人の許に身を寄せ、ギリシャ語新約聖書とヘブル語聖書の一部を英語に翻訳し、このティンデル訳の聖書はついに1525年、ドイツで印刷されたのでした。しかし、この聖書がカンタベリー大主教、ロンドン司教の知れるところとなり、ティンデルは諜報員に七年間追跡された末1535年にブリュッセル近くで逮捕され、十八ヶ月間地下牢に入れられた後、1536年10月、くいに縛り付けられ、絞首され、さらに火刑にされて殉教の生涯を閉じたのでした。彼の最後の叫びは、「主よ。英国王の目を開いてください！」でした。ティンデルは牢獄に監禁されている間に、信仰義認と福音が約束する罪の赦しと神の恩寵を説き、看守と看守の娘はじめ、その他の看守の家族の者たちをキリスト信仰へと導いたのです。ティンデルが死んだ年、英国では二冊の英訳聖書が出回り始め、英国王ヘンリー八世の認可を仰いでいましたが、献上された最初の一冊を手にした王は、それがティンデルの訳であるとは露知らず、「神の名においてこの書を世界中の人民の間に行きめぐらせよ」と宣言したのでした。その二年後、王はさらに英国中の教会に全聖書のうち一書は英語のを置くようにと指示したのでした。ティンデルの生命をかけてささげた最後の祈りは、奇しくもこのようにして神に聞かれたのでした。